

だれがコロンブスを 発見したか

だれがコロンブスを発見したか

バックウォルド傑作選 1

アート・バックウォルド 永井淳・訳

DOWN THE SEINE AND UP THE POTOMAC

WITH ART BUCHWALD

COPYRIGHT © 1956, 1957, 1958, 1959, 1960, 1961, 1962, 1963,
1964, 1965, 1966, 1967, 1968, 1969, 1970, 1971, 1972, 1973, 1974, 1975, 1976, 1977

BY ART BUCHWALD

JAPANESE TRANSLATION RIGHTS RESERVED BY BUNGEISHUNJU LTD

BY ARRANGEMENT WITH

ROSLYN TARG LITERARY AGENCY, INC., NEW YORK

THROUGH TUTTLE-MORI AGENCY INC., TOKYO

PRINTED IN JAPAN

だれがコロンブスを発見したか

一九八〇年一月二五日第一刷

一九八一年三月十日第五刷

定価 一五〇〇円

著者 アート・バックウオルド

訳者 永井 淳

発行者 半藤一利

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話 〇三―二六五―一二二一

印刷所 共同印刷

製本所 中島製本

万一落丁・乱丁があればお取替えます

一口の珍味

開高健

アメリカ英語でティド・ビット、イギリス英語でティト・ビットという単語がある。コンサイスを見ると、『うまい食物の一口・とっておきのニュースなど』と出ている。料理でいえばオードブル、冷盆、点心、前菜、ツキダシなどにあたるだろうか。これは一口で消えてしまうような小さな物だけれど、たるみきつた舌をめざめさせ、荒んでくたびれた胃をむくむく起き上らせる役をになう物で、メーン・コースの大作、力作、労作とおなじくらいの腕、素養、覚悟がなければ作れない。

アート・バックウオルドのコラムは一流中の一流のティト・ビットである。世界中の新聞に流されて大歓迎されている。彼は写真を見ると太りすぎたヒキガエルといたくなる顔をしていて、いつも太い葉巻を、啣くはえるというよりはガツプリ頬張っている。この図太い風貌からあの軽妙で精緻で辛辣な、愉しい文体が出てくるのかと、ちょっと感じ入って見直したくなるような顔である。ダンナと、呼ばせて頂くか。

このダンナがさばく主題は口紅から水爆まで、森羅万象、日々属目するところの一切である。複雑怪奇をきわめた政治問題もダンナの手にかかるとシンプルそのものの文体で、たちまち、ばらりズン、茶茶滅茶苦茶。あとは微笑、苦笑、哄笑となる。ベルリン、パリ、イエルサレム、サイゴン、香港、どこでも私は英字新聞を買うと、まずダンナの名の入ったコラムがあるかないかをさがして、まっさきに読みにかかったものであった。流血、汚染、荒廢、陰謀、裏切り、叫びと囁きにみたされた新聞もその一隅だけはくつろぐことができるのである。ダンナのコラムを集めたペーパー・バックを見つかり次第に買いこんで、空港、駅、ホテル、白い時間ができるとかならずあの頁、この頁と繰って、気ままにツマミ食いたものである。

アメリカと自由主義諸国のはらむ矛盾をダンナが痛烈にからかうと、そのコラムはさっそくモスコの新聞に出る。しかし、ダンナは翌週あたりに素速く返す刀でソヴィエトと社会主義諸国を切って捨てるのである。つまり両方の超大国を、クジラとクマを同時に手玉にとつてダンナは稼いでいらっしやるのであって、これにはよほどの眼力と才筆が要求されるが、このいやらしい、黷だらけの時代にはちよつと稀有の存在といつてよろしかろう。十五年ほどの昔、サイゴンの英字新聞に出ていたコラムがあまり卓抜だったので、帰国してから、ダンナのペーパー・バックの一冊から三、四篇ぬきとり、どこへ発表するあてもないままに、深夜の愉しみとして訳してみたことがあった。しかし、読んだときはゲラゲラくすくす笑えたのに、いざペンをとつてみると、その文体のかくし味と切れ味のみごとなシンプルさが、じつは至芸の難物であるとわかり、ほとほと手を焼いたあげく、脱帽してさがってしまった。真夏の戸外を汗みどろで歩きまわったあとに飲む一杯の冷めたい水の最初の一口のように単純で深くてむつかしい。そんなところがある。

何を笑うかで諸君がわかる、という警句がある。やつとバックウオールドが日本語で読めること
となつて、胸苦しい時間や白い時間が微笑でうっちゃれるようになったのは何といつてもありが
たいことで、訳者の永井淳氏に感謝したいが、この本のどの篇をどう笑うかでこちらの正体がバ
レちまうとあれば、おのおのがた、油断、怠りなく、お笑いあれ。

だれがコロンブスを発見したか

目次

「できることをやっただけ」 15

第一部

六分間ルーヴル 29

善玉と悪玉 33

カフェ消閑法 36

国際社交界に飛入りする法 40

「いとしのメアリよ帰れ」 43

第二部

蝙蝠狩り大作戦 47

コンゴの臆病者 51

白い狩人、赤い狐 63

闘牛 69

第三部

田舎の週末 77

モナ・リザ・クラウチ 84

三つ星肝臓クラブ 88

暇つぶしの名人 91

シチリアから愛をこめて 95

人生の真実 その一 99

指は堤防の穴をふさがなかった 104

おかしなおかしな種族 107

ヨーロッパ商人氣質 111

第四部

七年目の浮気 117

湯沸かし器の修理法 122

プレゼントの功罪 126

ストーリーイテラー 129

口がべとべとする 133

フランス人と車 137

健康狂 141

スポンサーは神様 145

経費節約運動の実態 148

イタリアの国技 152

第五部

義母 157

あなたが女性なら―投票はするな 160

ミサイルの謎が解けた 166

しあわせな夫婦 169

香港のベスト・ドレッサー 172

ハガティ・ウオズ・ヒア 175

第六部

デイナー・ゲスト貸します 179

本物の甘い生活 182

誕生日おめでとう 186

フランス生活十七年 189

アメリカを動かす秘書たち 193

慈善はフロリダに始まる 196

猫も杓子も… 198

アメリカは赤字 201

運命の水兵 204

第七部

政治危機 209

ワシントンのパーティーは意味深長 212

人生は六十歳から 214

家事疲労症 217

息子自慢 220

ギリシア式野球 223

テレビのどこが間違っているか 227

第八部

宣伝の効果 231

アイ・ドント・ノー 234

恐るべき軍拡競争 236

極秘の飛行機 239

防衛力の低下 242

オーヴァーキルの解決策 245

情報過多 247

気まぐれバス 250

客盗人 252

草の葉 255

空手の名手 258

ザッツ・ショー・ビズ 260

「アイ・アム・ザ・グレートテスト」 263

名著のサブタイトル 267

マークよさようなら 269

樹木外科医 272

職を求む 275

ノナムラ情勢はいかに 278

クラスーの秀才 280

クーデター講座 283

ロシア人はなぜ亡命するのか 285

第九部

宣伝教化 289

にんじんと鞭 291

我田引水 294

ノノムラの精鋭軍 297

アラバマ州の読み書きテスト 300

求む、料理長 303

下着と愛国心 306

コンピュータの崇り 308

ポップ彫刻家 311

だれがコロンプスを発見したか 314

臨時新聞配達 318

おかしな二人 321

大使の憂鬱 324

ゼムルル情勢異状なし 327

スポック博士とクリスマス 329

親はなぜ足算ができないのか 332

パジャマ・パーティー 335

貧困との戦い 338

最後のアメリカ人 341

新種の外交官 344

ラ・エンチラーダ 346

公式訪問 349

マンハッタン売ります 352

装幀 和田 誠

わたしは本書をアメリカの納税者に献じたい。彼らのおかげでわたしは一九四八年に復員者援護法を利用してパリへ行くことができたし、そのおかげで《ヘラルド・トリビューン》ヨーロッパ版のジェフリー・パースンズ・ジュニアに雇ってもらえたし、そのおかげで《ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン》の発行者ヘレン・リードにシンジケート寄稿家として使ってもらえたし、そのおかげで一九五九年にジェームズ・ハガティと喧嘩することができたし、そのおかげで一夜にして有名になれたし、そのおかげで《ヘラルド・トリビューン》を買収したジョック・ホイットニーに一九六二年にワシントンへ派遣してもらえたし、そのおかげで五人の大統領について書くことができたし、そのおかげで十六冊の本を出版し、その大部分を編集したビル・ターグの勧めで二十五年間の執筆活動の集大成である本書を世に問うことができたし、そのおかげで妻のアン・バックウオルドに彼女の習慣となった生活スタイルを維持させることができたからである。

さらにまた、わたしがニクソンの政敵リストに入りそこなったあとでも、わたしへの支持と忠誠が揺らぐことのなかったアメリカの新聞読者にも、この本を捧げたい。

だれがコロンブスを発見したか
ハックウオールド傑作選Ⅰ

